山口県立大学
Yamaguchi Prefectural University

第24号
2014年12月15日

公立大学法人山口県立大学　附属

郷土文学資料センターだより

展示「『新潮』編集者、楢崎勤の文学活動」について

加　藤　禎　行（当センター研究員）

楢崎勤（1901〈明治34〉年～1978〈昭和53〉年）は、山口県萩市出身の小説家、編集者です。楢崎勤は、昭和初年代の文壇において、新興芸術派の作家として活躍しました。山口市仁保出身の嘉村礒多や、岩国市出身の宇野千代などと、同時期に活躍した文学者です。そしてまた、新潮社に編集者として入社し、1926〈大正15〉年から1945〈昭和20〉年までの間、雑誌『新潮』をほぼ独力で編集した編集者でもありました。その編集者としての経験や見聞は、文学回想『作家の舞台裏』（1970〈昭和45〉年11月、読売新聞社）にまとめられ、現在のわたしたちに昭和文壇の息吹を伝えています。

今回紹介する展示「『新潮』編集者、楢崎勤の文学活動」は、山口県立山口図書館に併設された「ふるさと山口文学ギャラリー」を会場として、2014年１月14日から４月29日までの３ヶ月に亘って開催されました。展示の構成は、楢崎勤の文学活動の全体像をフォローできるよう時系列に沿ったもので、彼が生きた時代の雰囲気を展観者に伝えていくために、色彩豊かな表紙意匠を備えた初出雑誌や初刊単行本、また多くの同時代資料がケースに並べられました。

この展示に出品された郷土文学資料センター所蔵の楢崎勤関係資料は、初出雑誌・初刊単行本・肉筆資料に分けることができますが、とりわけ肉筆資料について言えば、小説「夜の階段」「影山亜紀子といふ女」原稿や、文学回想『作家の舞台裏』「あとがき」草稿、さらには雑誌『新潮』を編集していた時期の楢崎勤に宛てられた、昭和期の文学者たちによる諸家書簡を多数所蔵しているところに特色があります。

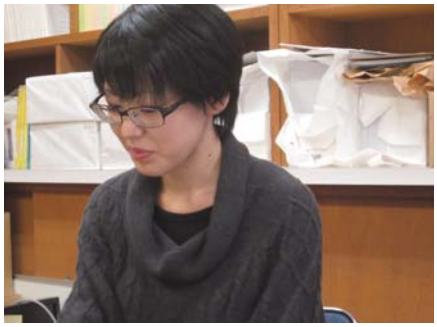
この展示は、文化創造学科の展開科目「地域実習」（2013年度前期）および「近代文学資料論」（2013年度後期）の授業を通じて、１年間近い準備期間を経て公開に至りました。前者の科目では、のちに「ふるさと山口文学ギャラリー」での展示キャプションの記述に結実していく、楢崎勤の全著作の書誌データ採取と梗概作成に取り組み、後者の科目では、楢崎勤宛諸家書簡を中心とした肉筆資料の翻刻と注解を行いました。このプロジェクトに取り組む学生たちが、大文字で記されることが多いとは言えない楢崎勤という書き手の文業に率直に取り組み、そしてひとつひとつの発見に驚嘆していく姿は、みずからの暮らす地域に根ざした文化を再発見していく営みそのものであったようにも思われます。こうした郷土文学資料センター所蔵の資料を用いた展示作成は、今後とも機会を得ながら継続的に取り組むことで、地域のみなさんに届けていきたいと考えています。

学生インタビュー
～展示「『新潮』編集者、楢崎勤の文学活動」を終えて

今回は、楢崎勤の展示に携わった本学学生のうち、展示当時３年生だった３名（油田宙さん、高森千尋さん、橋本明香さん）にインタビューを行いました。
準備段階から展示開催まで、その舞台裏を追ってみました。

――今回の展示は、直接的には「地域実習」における成果（※詳しくは、前頁の加藤研究員の記事をご覧ください）として位置づけられると思いますが、具体的に、まずどのような作業から始めたのでしょうか。

油田　メインとなったのは、楢崎勤の小説類の梗概（あらすじ）を作ることでした。それぞれの学生に分担が割り振られたのですが、短編小説が多かったとはいえ、かなりの量をこなしました。通常の授業でも、梗概を作成する課題は出るので、はじめての経験ではなかったです。


高森　千尋さん

高森　ただ、中には脈絡のない話もあって、そういうものは梗概化が難しかったですね。逆に、短すぎる作品も書くのが難しかった。

橋本　一年上の先輩の担当には、楽譜（作詞）があって、これは何を書いていいのか困っていました。

油田　宙さん

――内容的に、何か印象に残っている作品はありますか？

橋本　『文壇シナリオ集』というアンソロジーに収録された作品を担当したのですが、これには、別に小説のバージョンがあって、両者を比較して面白く読みました。それと、『若樹』という作品は山口を舞台にした児童文学で、夏みかんが出てきたり、馴染みのある地名が登場したりして、親近感がわきました。

油田　色々なタイプの作品があって、舞台が日本のものもあれば外国のものあって、多様だなと思いました。

――そもそも、楢崎勤という人物については知っていたのですか？

油田　加藤先生の講義（「近代文学資料論」など）に、幾度となく編集者として紹介されていたので覚えてはいましたが、彼の作品を読むのは初めてでした。

橋本　明香さん

――その「近代文学資料論」では、当センター所蔵の楢崎勤宛の書簡類を翻字したと伺いましたが。

橋本　本当に色々な作家からの手紙を目にして、楢崎という人が大正時代から戦前までの、日本の文壇のキーマンの一人だったことが手に取るように分かりました。作家とのやりとりの痕跡であ

る手紙を読むことで、編集者の仕事の一端を垣間見ることができたのですが、これは自分にとってとても珍しい体験でしたね。

高森　楢崎宛の書簡なので、当然、楢崎自身の手紙は目の前にないわけです。なので、作家側の手紙の内容から推測して、楢崎がこんな返答や対応をしたのだろうなぁと、自分たちで想像しながら読む必要がありました。これがかえって楽しかったですね。

油田　今回、書簡類はそれほど展示に出なかったのですが、授業では書簡の内容や年代などを考証して、発表もしました。これとともに膨大な梗概を書くといった地道な作業が、展示をするにあたって、見えないところで役立ったと思います。

――そうした作業を通して見えてきた、楢崎勤という人の印象はどのような感じでしたか。

油田　とにかく、真面目、律儀だと思いました。編集者として作家に対し誠実に対応していたことが書簡などからよく浮かび上がりました。時には、お金の無心に応えていたフシもありましたし。

高森　やはり、作家としてよりも編集者としての印象が強かったですね。作家たちから結構な無理難題をもちかけられて、苦労している様子が分かりました。とにかく、作家たちから信頼は得ていて、また楢崎も決して作家を見捨てなかったのは偉いなと思いました。

――楢崎勤や作家たちの直筆原稿や書簡に触れて、その字体などで何か思ったことはありました？

橋本　楢崎の字は丁寧で読みやすかったです。律儀な感じが字にも現れていると思いました。作家では、何と言っても宇野千代の字です。かわいくって、今見ても現役感があります。これはモテると思った（笑）。

高森　書簡の内容でよく覚えているのは、ある作家が、自身のスキャンダルをすっぱぬかれたことに怒って、楢崎に向けてそのことを滔々と書きつづっている手紙。普段、この作家はペン書きなのに、その書簡だけは、巻紙に毛筆で書かれていました……。

――生の資料に触れることで、色々な気づきがあったようですね。
さて、こうした作業の成果を、カタチとして展示していくにあたって様々な苦労があったと思いますが、まずはキャプション作りについて伺いたいと思います。指導した加藤先生からは、展示ケースから少し離れても読めるように、字の大きさやフォントには配慮したとお聞きしました。たとえば、明朝体ではなくゴシック体を採用されたり、他にも多くの試行錯誤があったそうですが。

高森　パネルをとにかくたくさん切ったことを覚えています。切るときに迷いがあってはダメで、ひと息で切るのがコツというのも分かりました。ただ、一人ではできない作業で、パネルを他のメンバーに押さえてもらい協力し合って貼りました。できあがったときは、思った以上にサマになっていたし、きれいにできたので達成感がありました。

油田　できた！と思った後に、一箇所誤字が見つかってやり直したのもありました。あれには参りました。

――実際の展示では、本文の引用や写真もうまくパネル化して、見応えのある内容でした。では、搬入での裏話を聞かせてください。

高森　搬入は日中の限られた時間で、しかも初めて使用するスペースだったので、とにかく時間との戦いでした。悲しかったのは、かさばって運ぶのが大変だったイーゼルが、そこに設置するために準備したパネルが小さすぎて、結局使わなかったことです（笑）。

油田　運搬用のケースがあれば、搬入がもっと安全かつスムーズに行くと思いました。

――資料の設置やレイアウトでは、どんな点に苦労しましたか。

橋本　下見に行って実測までしたんですけど、やはり想定外の連続でした。突貫工事的にやったところも多いですね。

私が覚えているのは、額縁内の後ろ側に隙間ができてしまって、しっかり固定するために、ツメの間にスペーサーとして紙を畳んで入れたことです。

それと、予想外に展示スペースに奥行きがあって、いざ置いてみると、なんかさみしい感じがして、やり直しました。

ディスプレイの仕方が単調にならないようにっていうのが難しくって、また、余白もうまく使うことも必要だったり、並べてみたら、曲がっていてやり直したり（笑）。

高森　空間的に余裕のある大きな展示スペースの中で、資料をどうバランスよく収めるか、物理的なところで苦労しました。

それと、キャプションと本とのレイアウトが難しくて、どの資料がどのキャプションと対応しているのか、誤解を与えないよう示すために、何度も置いては遠目で見る作業の繰り返しでした。

油田　ブックスタンドがあれば、資料（書籍）を立てることも出来たのですが、あの当時はなくて……。

――そうした苦労の末、展示の準備が終わり、今度は最初のギャラリーとして見ることになったわけですが、ガラスケースを前にどのように思いました？

高森　達成感がありました。

油田　展示らしくまとまっているなぁと思いました。今回、展示というものの一部始終が曲がりなりにも分かった気がしています。

――実際の展示を御覧になった方から、どんな反響がありましたか？

橋本　母親が展示を見に行って「なかなかよかった」って言ってもらい、うれしかったです。

高森　文学館に勤務されているプロの方が見てくださり、専門的な立場からコメントをいただけたのもありがたかったです。

――展示では、原稿をカラー印刷した複製や、雑誌の表紙などもユニークなものがうまく配されていて、時代の空気がよく分かりました。全体としてメリハリのある展示だったと思います。
一連の実習では、これまで取り扱ったことのない一次資料を多く扱ったわけですが、その点で感じたことなどはありますか？

橋本　実は、展示のために調査をしている時、ある関連資料の表紙がとれてしまって、あのときはショックと申し訳なさに泣きました。もともとかなり痛んではいたのですが、だからこそ扱いは慎重にしなければならないと痛感しました。この資料は先生がなんとか修復してくださったとはいえ、もう二度とこのようなことがないようにと心しています。

油田　資料の取り扱いには慎重になったよね。

高森　薄い便箋や原稿用紙は、汚したり破損したりするのが怖いので、極力触らないようにしました。

――その後、他の展示を見る機会があったと思いますが、何か気付いたことなどはありますか？

高森　吊り下げるパネルを、私たちは二本のワイヤーで吊っていたのですが、壁にゆがみがあるなどしてなかなかまっすぐになりませんでした。ところが他の展示では、一本で吊っていたので、ああこうすればよかったのかと。
それと、中原中也記念館は、本当にすてきな展示をされているなと改めて思いました。

油田　これから、卒業研究でパネルを作成するので、今までに培ったものを活かしていきたいと思います。

――楽しみにしています。文化創造学科、とりわけ日本文化系の実習の姿が具体的によく分かりました。こうした文化が、学科内でどんどん引き継がれていくといいですね。
今日は、卒業論文の準備などでお忙しいところ、本当にありがとうございました。

全員　ありがとうございました。

（2014年11月４日　山口県立大学内にて
聞き手・木越俊介）

寄贈図書（2014年6月～11月）

浜崎勢津子『女の城』・やまぐちメセナ倶楽部『メセナで育む文化の力』・河村正浩『春宵』・中原中也記念館『中原中也と日本の詩』

寄贈雑誌（2014年6月～11月）

『其桃』第835～839号（其桃発行所）・『文芸山口』第816、817号（山口県文芸懇話会）・『あらつち』第693～695号（あらつち社）・『山彦』第122～124号（山彦発行所）・『ふるさと紀行』第138、139号（ふるさと紀行編集部）・『地橙孫新聞』第12号（兼崎地橙孫顕彰会）・『颺』第96、97号（颺文学会）・『'14現代山口県詩選』（山口県詩人懇話会）

第７回　鷺流狂言 in 山口県立大学

恒例の鷺流狂言公演が、今年度も開催されます。

日時　平成27年１月25日（日）13時30分開場
14時開演

場所　山口県立大学　講堂（桜圃会館）

プログラム　「船ふな」「狸騙」（新作・初演）「颯果」

※入場無料（申し込み不要）

編集後記

▼今号は、本年初頭に行われた楢崎勤の展示に関する特集号としました。▼この展示は山口県立山口図書館内の「ふるさと山口文学ギャラリー」にて開催されたものですが、本学の学生と教員が中心スタッフとなり、企画運営されました。当センターの所蔵資料の公開を目的としながら、授業内の活動の成果としてまとめられたものです。▼まずは、当該展示の指導と統括を担当した加藤研究員に、全体像を報告していただきました。楢崎勤という昭和文壇のキーマンの一人に今後ますます光が当てられることと思います。▼ついで、展示に深く関与した学生のうち、在学中の３名にインタビューを行いました。様々な苦労話はもちろん、各自が得た達成感など、貴重な証言となっています。▼本学の文化創造学科では、地域の文化をテーマとした実習が行われており、その中に複数のプログラムが用意されております。今回の展示は、そのプログラムがいかに充実したものだったのかを物語っていると思います。▼展示のプロセスにおいて、学生が地域の文化に深く携わり、積極的に発信していくというプログラムのねらいがいかんなく発揮されていたことがよく分かりました。▼今後も、当センターの所蔵資料の活用にあたって、プログラム型の授業との連携を進めていきたいと思います。次回の展示の機会にはぜひ足をお運びいただけましたら幸いです。（K）

山口県立大学
Yamaguchi Prefectural University

■編集発行：公立大学法人山口県立大学附属郷土文学資料センター（〒753-8502　山口市桜畠3-2-1）
TEL.（083）928-0211　　FAX.（083）928-2251
■発行日：2014（平成26）年12月15日